卒業生紹介

コケはわが人生の友　～学芸員として働く～

Uzawa Mihoko
鵜沢 美穂子

ミュージアムパーク
茨城県自然博物館　学芸員

千葉県生まれ。2006年お茶の水女子大学理学部生物学科卒。2008年東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻修士号取得。2011年同大学院博士課程退学。2010年から現職。専門はコケ植物の形態・発生学。顕微鏡写真や動画などの撮影が趣味。

コケとの出会い

「こんなに小さいなりに生きているんだ!」

胞子をふわふわと飛ばして子孫を残そうとする命の営み。高校の下校途中、畑のふちに広がるゼニゴケの大群落がふと目に入った。近づいてじっと眺めてみると実に面白い。今まで見たこともない奇妙な形状、小さいけれど精緻なつくりに感動した。

「それ以来、歩くたびにコケが気になり、さらにコケ以外のミクロな生きものの多様性にも気づくようになりました」。

思えば、幼稚園の頃から、物知りの祖母に道端の草花の名前を教えてもらっては図鑑を広げ、「新しい植物を見つけてみたい」と夢見る少女だった。

お茶大理学部生物学科に進み、一度は当時主流の分子生物学の道に心が揺れたものの、卒論は「やっぱり好きなコケを研究対象に」と思い直す。研究室を訪ね歩き、植物形態学の山下研に入ると、そこから、もう一人の恩師との出会いがひらかれた。コケの専門家である国立科学博物館の樋口正信先生を紹介され指導を受けたことが、その後の鵜沢さんの「コケ人生」に大きな影響を与えることになった。学部卒業時には、コケの研究ができ、同時にその魅力を人に伝えていく仕事をライフワークにしようと決めた。学芸員への道がスタートした。

学芸員の醍醐味

身近にあるけれど、実はあまり知られていないコケ植物。2013年にミュージアムパーク茨城県自然博物館で開催された企画展「こけティッシュ 苔ワールド!」は、その知られざる魅力を総合的に紹介した大型展覧会として話題をよんだ。この企画を担当した学芸員が鵜沢さんだ。

「コケティッシュは『魅惑的な』という意味で、女性の持つ美しさを表現するのに使われます。コケはともすると、『わび、さび』の世界で語られることが多いのですが、企画展ではそれを打破し意外性を引き出したかったのです」と、意図を語ってくれた。

実は、博物館で一番多い客層は小さい子供と母親の親子連れだ。鵜沢さんは自分とも年齢の近い若い女性や子供の目線にたって企画を練った。「うんちく」ではなく、コケのもつ「多様性と美しさ」を親しみやすく訴求しようと、カラフルでポップな展示を工夫した。「数年前からあたためてきたアイディアを形にすることができました」と微笑む。

企画展の入場者は3か月で14万人を突破した。安堵の思いとともに、鵜沢さんはこれまでの道のりを振り返って、「運」とそれを掴みとる日頃の努力の大切さを痛感していた。

豊かな緑に囲まれた「ミュージアムパーク茨城県自然博物館」
http://www.nat.pref.ibaraki.jp/index.html

「熱意は奇跡を生む」

多くの学芸員のポストには国家資格が必要だ。東大大学院の生物学修士課程に進み、学芸員の資格は取得できたものの、今度は職がないという厳しい現実に鵜沢さんは直面する。絶対数としてポストの空きが出ないことに加え、専門性をいかそうとすると選択肢が更にせばまる。大学院に在籍し、研究活動に苦労しながら、いつ空くかわからないポストを延々と待つ日々は「鬱々と辛い時があった」と振り返る。

2010年、チャンスは突然やってきた。茨城県自然博物館が学芸員の公募を出したのだ。しかも、非維管束植物（コケや藻類、菌類など）担当だ。近場で比較的専門に近いポスト。「こんな機会は10年に一度も巡ってこない。これを逃したらもう次はない」と背水の陣で試験に臨んだ。

現在の鵜沢さんの仕事は、県内のコケ植物の調査、標本の整理、入館者や学校への教育活動、展示企画、紀要の編集など多岐にわたる。「忙しいけれど、この仕事に就けたのは『奇跡』だと思うので、一生をかけてコケの奥深い世界を伝えていきたい」と語る。

大学生の頃、たまたま露店で小さな色紙を買った。「熱意は奇跡を生む」と書かれたその色紙はいまも部屋の片隅に飾られている。

高校時代のコケとの「衝撃的な出会い」から10年以上の月日がたつ。コケは遠ざかったり近づいたりしながら、鵜沢さんの傍らにある。いつも、これからも。

文責：坪田 秀子（学長特命補佐）

わたしのオフタイム

休日は、まず体を休めて英気を養う。そして家事や買い物でリフレッシュというのが定番だ。仕事柄、各地に出向くことが多いので、旅先で美味しいものを食べ、温泉につかるのが束の間のオフタイム。